随想

田圃の中の古塔

―直川の地区集会に加つて―

羽柴　敬

一月三十一日（日曜）直川上の地でバスを降りた高木会長と私氏、正定寺小祭住職即運和尚宅で細川内の奥、黒沢の観音堂に参拝した。長田会長、林石会員。それに横川から井上氏も一しよ。ここは既に会として二度訪れている。

然しこの日は御本尊延命地蔵尊の拝観が叶つた。仏像彫刻に明るくない私は、この仏像の出来の批評は出来ない。ただ「駆流のお地蔵さん」と農民に信仰されつづけていることをしみじみ思つた。この日も遠く谷川ぞいの道を、歩いて参拝の人の姿が見かけられ、時勢の流れに押し流されることなく、今もつて法燈がかかげつづけていること、寺院そのものであると思つた。

境内の宝篋印塔の建てられた頃が、ここの歴史を正しく語り知る手だてはないものか。

原町に寺をとめて道ばたのお地蔵さんを見る。大抵のお地蔵さんはおつにすましてお出でだが、このお地蔵さんは相好をくずして笑つているつしやる。

寺は岸の上の桜井氏の家に問つた。然し金堂にまつ直ぐに行く前に二か所を見た。

「つは月米（つうろい）の遺跡。堂跡の左手に半ば埋木におおわれてはいるが巨大な石碑、「南無釈迦牟尼如来」とある。外に石仏や庚申塔など。数アーか人家のないこの小部落にこのような塔碑、正定寺とゆかり深いことが実感となつて受とれた。

次は田圃の中の古塔。橋を渡つた向う岸の田圃のまん中にあつた。

あれ台座を矢い、相輪も下半分を欠き、塔身と笠部が逆になつている。然し何というすばらしい姿、茶壺形の塔身の整つた形、角の部分のしつかりした張り、さほど大きくはないが堂々と引きしまつている。笠も出来がよい。均整のとれた笠根の反り、どこかに埋つているであろう台座を仮りに見つけて私は次のように復元して見る。

こんな姿になると思うが、今は水田のまん中に、耕作の邪魔になる格好で存置されている。耕運機が当つていためるおそれも多い。遠くに移すことは問題があるが、せめて五六米寄かして、この田圃の一隅に移し、台座を据えて右のように復元したらどんなものか。

肉眼でこの種の古塔、当るとか祟りがあるとか称して敬遠しがちであるが、歴史性のあるものの故よそに移すことは慎重にしなければならないが、正しい姿にかえすべき立派に整えるのであるから、祟るどころか大いに幸福をもたらすべきー古塔に宝篋印塔、長んぐ下さるはずである。

桜井家には赤木から柳井氏、上ノ地から小野氏が加わり、賑やかな会となつた。

ここで私は前記、宝塔の復元をといた。きけば、この附近おちこちに五輪塔やこの種宝塔が十数基あるという。彼岸には宝篋印塔や宝塔は多くないのであるが、今日の会合で必ずしもそうでないことを何か古文書と同じでないので、はかく、知らないのであると思つた。調査や発掘につとめなくてはならない。

長田氏は古業集を引いては古い郷土の歴史を語られる。小野氏、柳井氏も大いに語り、主人桜井氏はへそまがり人生観を行つて話がはずむ。

仁田原の谷の、いや直川の里の古い姿がはずむ座談の中にとけこんで、郷土の歴史の長い流れを私共に見せる。

一杯も出て座は更に賑やかになる。桜井氏は山芋を振つていて、まつ白いとろろを市販品でさつと集められていたが、庭一杯いの盆栽も大変な数である。それに帰る前に寄いた仁田原の戸主会春季の広報紙「仁田原」に書かれている仁田原共有林の由来は単重に足る資料で興味ふかく拝見した。

午後四時、バスの時間が来たので辞去した。林石会員の奔走によつて極めて収穫の多い地区集会であつた。御参会の方々に衷心から謝意を表したい。

（おわり）

集会記録

一月の訪問史談会の概況

日時　二月六日（土曜）午後二時から

会場　佐伯市東区　清田義雄氏方

先ず最初に清田氏多年の蒐集になる児童玩具を拝見する。素朴な民芸品が殆んどであるが子供に対する愛情があふれている。国内各地のものから朝鮮、中国から世界各地のものまで、それは夥しい数である。いろいろお話を承わる。

お住居は新年の新築でよく行届いた設計、室内の設備、調度品もすばらしく、御夫妻がうらやましいと思つた。

それから羽柴用意の「大島神社家の由緒文書」（　ページ掲載ものの）複写古文書の解説を試みる。又日田の広渡氏から寄せられた「西国城代日田陣屋之図」を話題にしたり、寄贈文献を紹介したり。

即興待をうけて恐縮、午後五時すぎ散会。